1P40

家族で楽しむ季節行事の経験と児の社会情動的スキルの発達との関連

細川 陸也[1]、桂 敏樹[1,2]

[1]京都大学大学院　医学研究科
[2]天理医療大学　医療学部

【目的】
多様な経験は，児の社会情動的なスキルの発達に寄与することが指摘されている。そこで，本研究は，学童期における家族とともに楽しんでいる季節行事の経験と児の社会情動的スキルの発達との関連を明らかにすることを目的とした。

【方法】
2019年10-12月，愛知県内の小学5年生（10-11歳児）1,414名を対象とし，その養育者に自記式質問紙調査を実施した。主な調査項目は，対象属性，1年間に家族と楽しんでいる季節行事の経験内容（鏡開き，節分，ひな祭り，お花見，子どもの日，母の日，父の日，七夕，お盆，敬老の日，冬至. など），児の社会情動的スキル（感情制御 Emotional Regulation Skills，向社会性 Prosocial/Communication Skills）などであった。

【結果】
有効回答のうち，対象基準を満たした児653名を分析対象とした。1年間に家族とともに楽しんでいる季節行事の経験数の割合は，0-9行事：14.9%，10-14行事：28.0%，15-19行事：32.6%，20行事以上：24.5%であった。季節行事の経験と児の社会情動的スキルの発達との関連を検証するため，独立変数を季節行事の数，目的変数を社会情動的スキル（感情制御，向社会性）のスコア，調整変数を性別，家族構成，世帯収入，親の教育歴とし，重回帰分析を実施した。その結果，家族で楽しむ季節行事の経験の数が高いほど，児の感情制御，向社会性のスコアが高くなる傾向がみられた。

【結論】
本結果より，家族と楽しむ季節行事の経験は，学童期における児の社会情動的スキルの発達に繋がっている可能性が示唆された。発達を促す経験には様々な機会があるが，家庭における身近に楽しむことのできる季節ごとの行事や習慣を家族で大切にすることは，児の発達により良い影響を与えているかもしれない。

1P41

育児中の母親とソーシャル・キャピタルに関する文献検討

甲斐村 美智子[1]、福本 久美子[2]

[1]熊本保健科学大学
[2]九州看護福祉大学

【目的】
近年の少子化、核家族化等の家族形態の変化や、地域とのつながりの希薄化等により、子育てへの不安や育児困難感を抱える母親が増加している。このような中、地域の信頼関係や相互扶助の意味を包含するソーシャル・キャピタル（Social Capital：以下SC）の醸成と活用が期待されている。これまで日本におけるSC研究は、主に高齢者を対象としたものが蓄積され、育児中の母親を対象としたものは少ない。そこで先行研究を整理し、育児中の母親とSCとの関連について明らかにすることを目的とする。

【方法】
医学中央雑誌Web版とNII論文情報ナビゲータを用い、「SC」「母親」、「SC」「育児」をキーワードに1990 ～ 2020年の原著論文を検索した（2020年12月）。重複文献を除き、乳幼児を育児中の母親とSCとの関連について記載されている文献を抽出した結果、11件を分析対象とした。

【倫理的配慮】
著作権を侵害しないよう努めた。

【結果および考察】
文献は2016年から抽出され、2017年は7件であった。対象は、SCの差がある3地域、全国の472市区町村、過疎や農村・転入者が多い地域、原子力発電所事故により自主避難中の母親等であった。内容は、地域とのつながり等の実態調査が3件、SCと子育て感情・メンタルヘルスとの関連が各4件であった。地縁活動は、気持ちのゆとりや育児の自信、不安の軽減、地域の人とのつながりや信頼等をもたらしていた。地縁活動や一般的な信頼は産後うつ有病率と関連なかったが、ストレス軽減や子育て肯定的感情を向上させていた。なお、子育て感情と地縁活動には高SC地域のみ関連があったが、信頼とはSCの地域差は関係なかった。また、地域のスポーツ・趣味・娯楽活動は産後うつ有病率や虐待感を低下させ、近所付き合いは育児ストレスへの対処要因である育児マスタリーの一要因であった。さらにSCは、抑うつや次子希望、主観的幸福感の一要因であった。
SCを生かした子育ての意義が認識されるようになったことにより、2017年に報告数が増加したものの、高齢者を対象とした研究に比べ子育て中の母親を対象とした研究は少なく、研究成果の蓄積段階と考えられる。地域の特色に応じた活動等を通し、近隣住民への信頼感を基盤にSCを醸成することは、少子化や母親のメンタルヘルス対策、子育て支援の一助となることが示唆された。

【利益相反】
なし

Presented by Medical*Online